View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

成人の人格的発達研究の展開

エリクソン理論における中年期の発達課題の検討へ

丸　島　令　子

Summary

A Review of Adult Personality Development in Life–Span Developmental Perspective
——Some Considerations on the Developmental Task in Midlife of E. H. Erikson's Model——

Reiko Marushima

A review of literature on adult personality development is presented in the context of the life–span developmental perspective of human behaviors. Traditionally, conception of developmental change has focused on a definition of development as behavioral change manifesting characteristics of (1) sequentiality, (2) unidirectionality, (3) an end state, (4) irreversibility, (5) qualitative–structural transformation and (6) universality.

During the recent decades, dissatisfaction with the above mentioned definition was expressed among several developmentalists and gerontologists in their assertion that there is much discontinuity between child development and the remainder of the life span. The life–span developmental psychology has been integrated to support a position that includes (1) multidimensionality, (2) multidirectionality, and (3) discontinuity as key features of any theory of human development through the life span.

Three theoretical perspectives applied to the study of human development at the present time are discussed; the mechanistic, organismic, and contextual approaches. Then, an attempt is made to deliniate the theories (early formation theory, stage theory of development, dialectical analysis to personality development) to be particularly significant to the study of adult personality development. A point of a further discussion is on the concept of "generativity" that is presented in E.H.Erikson's model of adult development.

はじめに

“成人の発達”とは，どのように理解すべきか戸惑う人も多いに違いない。まず成人は若い成人から年配の成人まで年齢だけをみても幅が広く，これらをひとくくりにできるかどうか考えなければならない。若い成人が青年期の心身の成長の混乱期を脱して，青年期に選んだ自分自身の生き方を実現しようと上昇・発展の機運に満ちている場合はともかく，やがて中年期や老年期に入り，身体的，精神的，社会的に限界，あるいは下降という体験を意識させられる場合，成人の発達とは何を意味するのか一層疑問が生じることであろう。

本稿では，人間の発達について生涯的研究に方向づけられている現代の発達観の推移について論考するとともに，中年期の人格的，心理的な発達研究へと関心を向け，E.H. Erikson (1950) の発達課題の考え方について検討し，成人の発達心理学について考察を深めていきたい。

1．発達の前提と発達観の推移

発達という言葉のもつ意味，あるいは発達の前提は，従来，20歳代以前の若年期に限定され，年齢相関的，発達即一義的成長とみられていた。こうした成長曲線の頂点はほぼ20歳から30歳の間と仮定され，それに基づいた人間発達の研究の比重は，他を圧倒してきた。これらの研究に多大の影響を与えた偉大な学者に Piaget (1896–1980) と Freud (1859–1939) をあげることができる。Piaget も Freud も生物学的な発達モデルを基礎としている。発達心理学は彼らのこの有機体論的アプローチの研究の遺産を軸に，発展，展開，転換し，「生涯発達心理学」(life–span developmental psychology) へと認識されつつある。

(1) Piaget の認知発達理論と発達観

心理学の重要な研究テーマのひとつである認知発達理論のアプローチは，Piaget (1964) の研究に強い影響をうけている。Piaget は1950年代までに論理数学的認識の基礎となる操作的認知構造の発達を研究し，獲得される諸構造の質的差異に基づいて「前操作的段階」，「具体的操作段階」，「形式的操作段階」という3つの思考の段階を識別し，提示したことでつとに知られている。

Piaget の理論は個人が乳幼児から児童，青年，成人へと発達するにともない，個人の中に質的，構造的変化が生じると仮定されている。とくに乳幼児期から発達を続け，青年期において完成の域に達すると仮定された「形式的操作」の思考段階の確立は，Piaget によれば，青年の思考のすべての領域にかかわるものであり，かつ，どのような文化的文脈や社会においても普遍的にみられるというものである (Inhelder & Piaget, 1958)。このような Piaget の主張は，子どもについての研究の 方法論の確立に貢献し，その後，いくつかの方向へと展開していった (Kagan, Moss & Sigel, 1970; Kohlberg, 1978; Flavell, 1977)。

今日もPiagetの理論に基づいて研究は続行されているが，Cole（Cole & Cole,1989）らは，Piagetの理論が無視してきた局面の，文化によって発達差がみられる点を示唆し，SieglerとLiebert（1975）が，「形式的操作」は青年期に達していなくてもみられることを発見した。さらに，CaponやKuhn（1979）が，成人でも得意でない領域では，このような思考ができないことを見いだした。そのためPiagetが主張するように，青年の思考能力の発達が頂点を示すという発達観の前提に疑念が示されるようになってきている。

（2）Freudの人格発達理論と発達観

Freudは人格発達について，精神分析的な観点から，人生早期の人格形成とその影響の重要性を強調し（1905），“early formation theories（幼児期決定論）”を認識，普及させる源をつくった。Havighurst（1973）は，フロイト派の研究者らが，1920年以後，Freudの精神分析理論に基づいて発達心理学の研究に熱心であったことを認めつつ，彼らが成人以降の人格的発達に関心を示さなかったことを指摘している。それはFreud自身が，成人期を性器期と一括してとらえ，性的な衝動がコントロールされ，適応的な社会生活が営まれれば発達に問題はなく，ときに乳幼児期以来の抑圧されていた無意識的な葛藤を再現するだけであるという，精神分析の臨床的立場から，そのような成人の発達観をもっていたことによる。

Havighurstはその他に，フロイト派のDeutsch（1944，1955）が，更年期の女性の人格的な変化について仮説を立てたり，Hamilton（1942）が生活を4期に区分し，最後の「成熟から老年の人格的変化期（change from a mature to an aging personality）」を成人期（adulthood）とし，ego, superego, idの最も均衡のとれる安定期と仮定したことに注目している。Hamiltonは，40歳後半の女性の更年期や50歳代の男性の社会的停滞による性的な退行や，60歳以降の一種の精神的な退化の傾向を，自らの臨床的経験から観察したことを示した。しかしその後，彼の研究は返りみられなかった。

フロイト派はearly formation theoriesの推進者という観念を強くもたれるが，他方，以上のような研究者らが，フロイト派の本来の見解である欲求変化ということと，成人期や老年期における行動変化との関係について示唆したことは，発達についての近年の生涯的研究への視野を早くから提示していたと理解される（Havighurst,1973; Newman & Newman, 1975）。

（3）生涯発達心理学と成人の発達の前提

PiagetとFreudの二人の巨人の大きな影響は，誕生から大人になるまでの人間の心理的な成長・発達の過程の研究を刺激し，盛んにしたが，近年，成長・発達は生涯全体を含むという，発達概念の拡大が知られるようになった。つまり，おとなになるまでの生物学的な「個体発生（ontogenesis）」と死に至るまでの「生活史（life historyまたはlife cycle）」の過程へ視点を展開，転換させる傾向が強くなった。

生涯発達心理学が認識されるようになったのは，1960年代から70年代にかけてである。BaltesとGoulet（1970）は「生涯発達心理学は，誕生から死に至るまでの年齢相関的な個体発生（ontogenetic）の行動形式の変化について記述・説明するものである」と定義している。1970年代には，Baltesらを中心として，生涯発達心理学の理論や概念が検討され，その歴史的

系譜が考察された（Charles, 1970; Groffmann, 1970; Wohlwill, 1970; Havighurst, 1970; Baltes & Shaie, 1973; Thomae, 1979など）。彼らの論文から，以下，生涯発達観を理解することとする。

最初に life-span という用語は，暦年齢あるいは生活年齢が生涯にわたって発達させるものの第一次的変数ではなくて，むしろライフスパンのある時期またはライフコース（life course）の文脈のなかで，あるきわだった特徴的なことが達成される発達過程に焦点がおかれることを理解する必要があろう。Baltes によれば，こうした生涯発達観は近年になってからの見方であるということは正しくなく，それはヨーロッパの学者を中心として18,19世紀にその源が認められ，なかでも19世紀の半ばに Quetelet（1842）は，生涯発達研究の方法を工夫したということである。彼は総合的な視野によって，全生涯にわたるデモグラフィックな状況，身体的成長，心理的変数について考え，驚くべきことに，生涯のある特定の時期に特有な「歴史的事件」の影響要因を示唆したことが注目されている。しかし，Quetelet のこうした考えは100年間埋もれたままとなった。

20世紀に入って老年学（gerontology）の成立により生涯発達観や概念が展開していく（Hollingworth, 1927; Bühler, 1933; Pressey, Janney & Kuhlen, 1933）。その後，生涯的な枠組みにおいて個体発生的な行動形式の変化をとらえるためには，伝統的な発達変化の概念である①連続性，②一方向性，③達成，④非可逆性，⑤質的構造の変化，⑥普遍性は，あまりにも限定的であることが認識された（Baltes & Schaie, 1973; Bayley, 1963; Brim & Wheeler, 1966; Labouvie-Vief & Chandler, 1978; Neugarten, 1967; Thomae, 1979）。

そこで，生涯にわたる人間発達の理論の核心的な特色として「多次元性」，「多方向性」，「非連続性」が支持された（Löwe, 1977; Thomae, 1959）。これらの特色を Baltes と Willis（1978）は，図（2）のように表している。つまりその発達観は，従来の単純な累積的，一方向性的な概念よりもより複雑であることを表そうとしている。図（1）は生涯的な変化によって，個人内部に増大する行動の可変性を描こうとし，図（3）は生涯的な変化による行動的変化過程の多次元性，多方向性がもたらされることを示そうとしたものである。結局図（2）は以上のことを要約して生涯発達の複雑さを描いており，ライフコースにおける個人のなかの大きな変化や相違の多次元性，多方向性，非連続性の観念が示されている。つまり，生涯発達における行動の変化過程は，全生涯にわたって常に進展するとは限らず，また連続的な影響や過程という結果を必ずしも導かないことが理解される。そのため，行動の変化過程はライフコースの枠組みのなかで，始まり，持続期間，終結という点から相違変化を認めることができる。さらに，生涯発達の理論家らは，Havighurst の発達課題（developmental task）の概念における新奇な行動変化過程（novel behavior-change process）が，老年期をも含む 生涯の多くのポイントで出現しうることを示唆した。

以上のような発達観の転換は，発達変化の潜在的決定要因について多要因的な立場がとられている。Hultsch と Plemons（1979）らは，成人発達の解釈的論理を体系づけるものとして‘有意味なライフイベント’の考え方を検討した。また Bengtson と Black（1973）や Riley

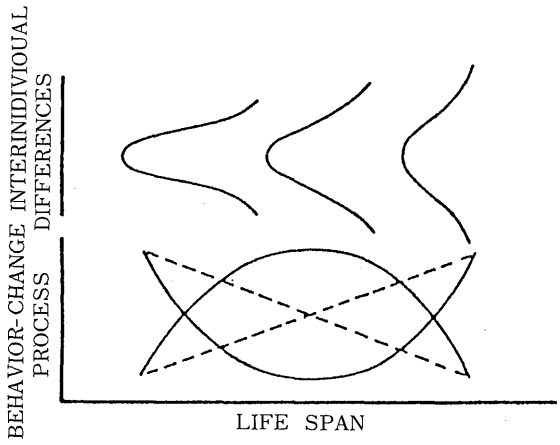


図1・2　成人の生涯発達における可変性モデル

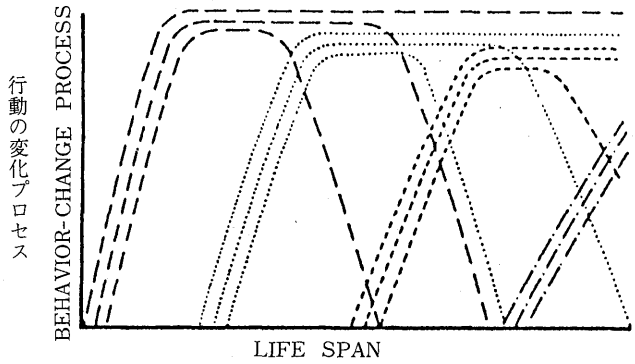


図3　成人の生涯発達における多次元性多方向性、非連続性モデル

出典：Baltes, P.B., & Nesselroade, J.R. 1979 History and rationale of longitudinal rescarch. In J.R. Nesselroade & P.B. Baltes (Eds.) Longitudinal research in the study of behasior and development (pp. 1–39). New York: AcademicPress.

(1976) らは，世代と年齢間のコホートの関係の構造的特質を採択した。また Baltes,Cornelius, Nesselroade (1979) らは，図 (4) のように，生涯発達の複雑な影響要因について表している。つまり，生体と環境との関係から個人の発達に及ぼす3つの先行的な影響要因として，①その年齢に標準的な影響要因 (normative age–graded influences)，②その時代に標準的な影響要因 (normative history–graded influences)，③非標準的なライフイベント (non–normative life events) があげられている。

①の，その年齢に標準的な影響要因とは，暦年齢もしくは生活年齢と高い相関関係があり，生物学的，環境的な決定要因であるとされる。その年齢にある人はほとんど経験する身体的成熟や義務教育などが例にあげられる。これは従来の伝統的な発達心理学が追究してきた要因である。②の，その時代に標準的な影響要因は，ある一定の時代やコホートに生きているほとんどの人が経験するものであり，戦争，恐慌，流行などがこれにあたる。③の，非標準的なライフイベントは，個人の人生生活史に重要な意味をもつが，多くの人が一様に経験するわけではなく，経験したとしても，その時期や様相が個々に異なっている。例えば，転職，失業，離婚，

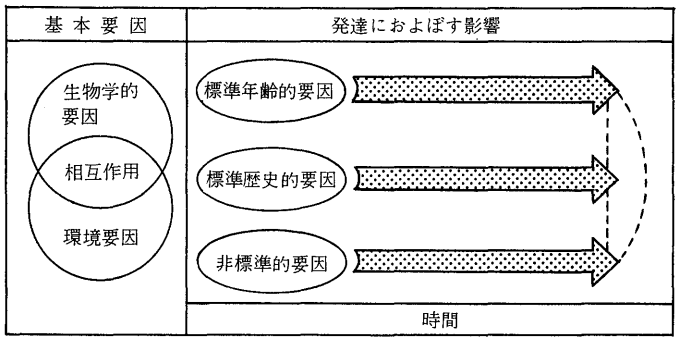


図4　発達の影響要因のモデル

出典：Baltes, P.B. 1983 Life-span developmental psychology: Observations on history and theory revisited. In R.M. Lerner (Ed.) Developmental psychology: Histrical and philosophical perspectives. Erlbaum.

病気，近親者の死などである。

Baltes らは，以上3つの要因は相互に作用しあって影響すると主張し，図（4）のように示した。このモデルは，これらの要因の相対的な重要性が認識され，それぞれが発達に及ぼす影響の強さは生涯のいろいろな時期において異なり，また特定の行動変化の過程に及ぼすことを表している。

このようなモデルによれば，青年を頂点としたそれ以前の発達は①を中心とし，②もかかわると考えられる。しかし，成人期以降における影響要因は①や②よりもむしろ③が強くかかわり，次いで②ということになろう。そのことは，人は年齢を経るほどに非標準的なライフイベントを多く経験するが，それぞれ千差万別の在り方があるだろう。それは成人の発達の多様性，個人差に寄与することが考えられる。

Santrock（1985）は，20世紀の半ばまでは，個人の人生時間の半分さえも包括した情報体系が存在しなかったし，定説のようになっている20歳から30歳に発達のピークに達した後は衰退し始めるということも，結局のところ未だ明らかになっていないのではないか，と指摘し，成人期に焦点化した心理学的発達の理論的モデルの構築がようやく注目されてきたことを述べている。

2．成人の人格的発達研究のアプローチ

前項までに検討したように，成人期にもわたる視野が広げられた発達観が認識され，それに基づいた成人の人格的，心理的なアプローチや理論の幾つかが主唱されるようになった。たとえば，機械論的アプローチ，有機体論的アプローチ，文脈論的アプローチの区別が認識されている（Hultsch & Pentz, 1980; Santrock, 1985）。そしてこれらのアプローチの諸研究は，成人の発達にかかわる幾つかの重要な理論を認識させている。なかでも　①幼児期決定論的人格形成論（early formation theories），②発達段階論，③弁証法的発達理論は，成人の研究の方法論を方向づける基本的なものと考えられる（Wrightsman,1994）。以下まず，三つのアプローチの論理的立場を概観する。

機械論的アプローチは，知覚は異なった刺激への弁別的反応に基づくとする行動主義的立場とされる。その基本的な見解は機械のアナロジーに基づき，全体は部分の総和とする点にある。発達の影響要因には外的な力を重視し，個人の行動は過去の経験と現在の状況によって形づくられるとする。学習理論は機械論的な行動理論とみられており，この観点からは人間の発達は受動的であることが仮定されている。しかし，Bandura（1986）のように，社会認知論（social cognitive theory）の立場では，人は自己や人生の目標，計画，将来の行動の理念となる基盤を形成するためには，他者のモデルによって幅広く学習する能動的な存在であるという方向へと展開させている。

これに対して有機体論的アプローチは，環境に能動的に働きかける個体を仮定したもので，発達・変化を記述する目的のために研究の変数として年齢を重視する傾向がある。それは内面の質的変化，発達段階，変化の連続性に関心をもつアプローチで，発達研究では最もポピュラーなものである。これは，有機体の誕生－成長－老－死までの連続的な変化過程を追究する目的をもつために「発達段階論」を導いた。

文脈論的アプローチは発達における社会，文化，家族，仕事，歴史における個人の時間などの環境的文脈の特有の諸要因に注目し，このアプローチは実際には，機械論的，有機体論的の両アプローチを取り入れて研究がなされる。個人と社会の相互関係が注目されるアプローチである。これは成人の発達研究において，比較的新しいが多大の関心が払われて，今日研究が試みられている。

以上のアプローチの研究の成果としてより一層成人の発達研究にインパクトをもたらした①幼児期決定論的人格形成論，②発達段階論，③弁証法的発達論について検討する。

①幼児期決定論は，広く知られているようにFreud（1905）の心理・性的発達理論からもたらされ，人生早期（5～6歳頃迄）の経験が後の経験よりも発達においてより重要とされる説である。また青年期までに形成された人格的特徴は成人期を通して持続する可能性があると仮定される理論である。Piaget（1952）の認知発達論も，この立場をとっていた。

この理論は母子関係の精神分析的発達理論を数多く生み出してきた（Spitz, 1946; Mahler, 1975; Winnicott, 1965; Starn, 1985; Bowlby, 1978など）。そこでは乳幼児と母親との関係における初期体験の研究に焦点がおかれてきた。このような初期体験論が成人の研究にかかわり展開していく過程には，幾つかの視点の転換のインパクトが示される必要があった。たとえばその一つに，初期の剝奪体験の影響はその後の体験によって実質的に修正され，行動やパーソナリティはライフコースを通して形成され変化するという考えがもたらされた（Brim & Kagan, 1980; Michel, 1968; Rutter, 1978）。この考えは初期体験がまったく影響しないというのではなく，初期体験の影響は，後から入ってきた経験や偶発事件によって調整されていき，結局パーソナリティや行動は生涯にわたって連続的に形成されるというものである。さらにFreud派から後Freud左派に傾いたHorney（1935）のいう「基底不安」は後年のノーマルな人間関係への対処行動によって修正されることが主張されており，初期体験の非可逆性を脱した視点を示唆していると考えられる。またJungはFreudの乳幼児期偏重の視点を成人へと展開させた

最初の貢献者とみなされており，彼のアニマ，アニムスの概念と中年期の個性化（individuation）の過程の人格形成論は，後述する弁証法的アプローチにつながる成人の発達理論を展望させた。

②の発達段階論は生涯的な成人の発達研究にとりわけ有効な理論をもたらした。有機体論的アプローチをとる研究の多くは発達段階論の立場をとっている。Freud や Piaget はその先駆となり，後 E.H. Erikson（1950）をはじめ，Havighurst（1953），Levinson（1978），Gould（1978），Peck（1955），Vaillant（1979）らが理論を展開させ，彼らは発達段階論者とみなされている。彼らの最も大きな特色は人格的，心理的発達を成人期以降を含めて関心をもち続け研究したことにあり，さらに文化的，社会的文脈の影響要因を重視して，心理社会的発達論を展開させたことである。なおまた，たとえば，Erikson 理論について言えば，それが Freud 理論と異なる一つの主要な点は，自我が単に不安などに適応するというような消極的，否定的な役割をもつというよりも，一貫した行動へと統合する機能をもつ積極的，肯定的な役割をもつものと強調していることである（Wrightsman,1994）。発達段階論は無段階論とても後に再度検討する。

最近，成人の発達研究で関心をよんでいるのが③の弁証法的発達論である。この理論は当然，哲学の弁証法（dialectics）の観念からきている。その基本的なポイントは，①対立する力あるいは対極性の考え，②対立する力，対極性の統一体の考え，③両者のダイナミックな関係性の考え，である。人格の発達論における弁証法的アプローチの理論的指導者の Riegel（1976）は，弁証法的発達論は均衡やホメオスタシスの概念が恒久的な適応を意味しない，なぜならば行動は常に変化するものであるからと主張し，この理論は不均衡の体験こそが健全であるとして焦点化したものであることを説明する。つまりノーマルな状態は常に不均衡であるとみなされる。Reigel は，発達段階論者は，各年代に発達課題を仮定するが，それは決して達成されることはなく，達成されたようにみえた瞬間に，個人のなかにさらに新たな心理・社会的な疑問が生じ，葛藤し，新たな解決の道へ展開するが，それらは繰り返し起こり終わることがないと説明している。このような考えは従来からの均衡状態の達成を焦点化して理論化するのとは反対のものである。その点でこの弁証法的発達論の見解は複雑な成人の心理的発達を理解する上で有用なものとみなされる所以である。

この理論のアプローチを示唆する研究に Levinson の中年期の男性の発達課題と仮定された四つの対極のもの：polarities（愛着／分離，破壊／創造，男性性／女性性，若さ／老い）の葛藤が決して完全に解決されることなく，次の段階へ移行して，さらに葛藤，解決を繰り返すことが主張されているが，注目される。

それではこのような葛藤と解決が完全に解消されないという見解は，いったい成人の発達をどこへ導くのかという疑問が生じる。哲学においても，人格発達論においても，この点で弁証法の楽観論と悲観論の両方の見地があるとされている。Levinson は，中年期の男性が直面する四つの対極性に対して主体が弁証法的な取り組みを通して，より高度な発達の次元へ導かれるという楽観的な方向を示唆している。Levinson の研究は面接法を中心に，中年期の男性に

対してのみ取り行なわれたが，今後より多角的に弁証法的理論による発達研究が試みられると，その有効性が明らかになると思われる。わが国の岡本（1982,1985）は「アイデンティティのラセン式発達段階モデル」を提示し，中年期の成人のアイデンティティの「再体制化」を示唆したが，このような研究は弁証法的発達論の局面を示したものと受けとれる。

3．発達段階論と成人の発達

前項までに検討したように，成人の発達研究は青年期までのように成長曲線的なとらえ方を脱した幾つかのアプローチが試みられるようになったことが理解されるが，成人の生涯的研究には，発達についていかに段階的もしくは無段階的に追究すべきかが，一般的に今日しばしば問題の焦点になっている。そこで，以下，本項と次項でこれら二つの論と代表的な論者について理解することとする。

段階論は主として，ある段階の達成は全先行段階の達成に依存しているという連続性が基本となっている。Flavell（1977）は，段階という発想は「ある段階から次の段階へのある程度の突発性と，一定の段階を特徴づける行動や有能さの同時的出現とを含む」と表している。しかし，この‘同時的出現’を実証することは困難であることも認識されている。Kagan（1980）は，段階論の示唆する発達変化は質的変化であり，突発的変化であっても「明記可能な過程の作用に起因する二つの時点で，現象的に異なる構造や機能の間の必然的関係が存在する」として，結合性を仮定した。だが彼はまた一つの過程もしくは行動パターンが別のものと取り替えられることがある段階の可能性も指摘した。このような非連続性の視点は無段階論として展開される。

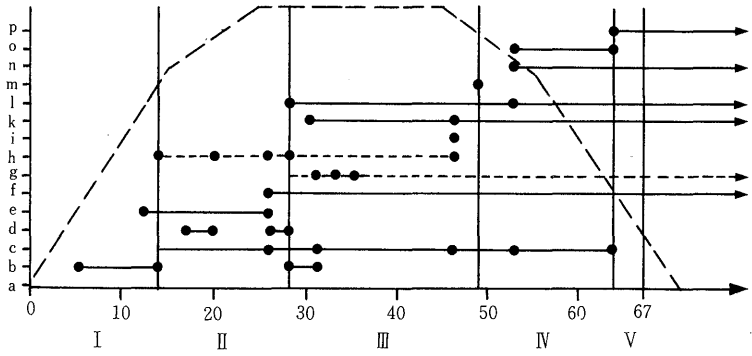
こうして段階論には幾つかの異論が示され，その概念の再定義が試みられたりしているが（Wohlwill,1973），ライフサイクルの概念と結びつくことによって，成人の発達研究を展開させてきた。

（1）段階論とライフサイクル

早くに段階的発達論を提示したのはBühler（1935）であるが，彼女は生物学的曲線に対応した心理社会的曲線を示した（図5）。彼女の研究は多くの伝記的資料を収集したことによるもので，人の生命全体という観点から努めて科学的な生涯発達モデルを試みた。後に彼女の研究はライフサイクルの概念と結びつく力となったとみられる。

生物学的な発生－発達論からくるライフサイクルの概念が人間生活に対して拡大適応されたのは100年も前に遡るが（Rowntree, 1901），その後，ライフサイクルは生物的な発達の意味のみならず，その退化，老化，終末の過程まで含む意味にとらえられ，そこから人間発達論へと結びついて行った（小此木，1985）。

すでにふれているが，『人生の四季』を著し，中年期の成人の発達研究を発表したLevinson（1978）は，‘ライフスパン’‘ライフコース’‘ライフサイクル’の用語を説明し，段階論の基本的概念を明確にしている。彼によれば，ライフスパンとは「生まれてから死ぬまでの時間的隔たり」を表すにすぎず，その時間がどのように埋められるか明確ではなく，ライフコースは



記号の説明

a：67歳の人生，10年きざみで示してある。
b：教育
c：職業の経歴
d：兵役
e：デート
f：結婚
g：子ども
h：移転
i：大旅行
k：自宅の建設
l：教会への参加と活動
m：病気
n：子どもの独立
o：離職，自営業開始
p：引退

図5　Bühler（1968）の心理社会的発達モデル
（ロバーツ・ビルの生涯図式）

出典：Bühler, C. 1933 Der Menschliche Lebenslauf als psychologisches Problem. Leipsig: Hirzel.

「時間を越えた人生の流れにおける特別な出来事や人間関係，功績，失敗，野心のような人生の中身の経過」を示すという。さらにライフサイクルという用語はもっと別の二つの基本的な意味をもつと指摘されている。

Levinson は，ライフサイクルとは第一に「出発点（誕生，始まり）から終了点（死亡，終わり）までの過程または旅」という考え方があり，第二にサイクルを「一連の時期または段階に分けてとらえる季節」という考えがあると述べている。つまり旅の進行はいろいろな様相があるが，それが続く限りは一定のパターンや順序があり，進行の流れは一定不変ではなく，それぞれの季節は独自の性格をもつと説明されている。このような人生の出発から終了までの視点をもって，成人の人格的発達をみようとしたのは，やはり Jung（1930）に始まる（河合，1983; Havighurst, 1973）。Jung は人生を‘午前’‘正午’‘午後’にたとえ，人生の正午である40歳から始まる人生後半における発達について，より注目した。

近年「ライフコース」という用語がしばしば使われるが，それはライフサイクル概念による一般的な段階パターンのみから発達変化を説明することが困難になってきた現代の社会的状況が影響している。ライフコースの考えは縦断的研究から導かれてきたもので，とくにそのコホート研究は個人の発達や人生の展開が社会的，歴史的事件との関係なくして理解しがたいという分析結果を導いた（Elder,1974, 1975）。つまり，さきにふれたように，その年代に標準的な影響要因としての一つの歴史事件に，多数の人々が同一の状況に置かれるのであるが，そのことによって，個人の発達に相違がみられることに注目されるようになったのである。ここから個人の発達差に焦点をおいた成人の発達研究が開かれている。このような系譜から，Nuegarten らに続く無段階論の視点となってライフコースの概念に関心がよせられている。

ライフサイクルとライフコースの考え方は，段階論と無段階論が相互に影響し合ってダイナ

ミックな研究方法を展開していくとともに，相互に重要な概念になるものと思われる。

（2）Erikson の段階論

Erikson 理論の考えには，「人生段階（ステージ）」の全体をひとまとまりに表すのにライフサイクルが用いられている。

Erikson は，1940年，人格の発達について「個体発達分化の図式」として示し，その書『Childhood and Society』（1950，1953，1956，1959，1963）は，今世紀の半ば，最も多方面に影響力をもったものと評価されている。Erikson はそのなかで，異なった文化における子どもと成人に関する研究を多数示した。

わが国においても Erikson 理論の解説者は多いが，鑪は（1990）は，Erikson の発達理論に関する特徴的な考えを5つにまとめている。つまり，①人間生涯のイメージ（生涯にわたる自我の発達と歴史的，文化的な影響），②グランド・プラン（先天的に規定された個体の素因としての8つの発達課題；基本的信頼性／自発性／自律性／勤勉性／同一性／親密性／生殖性／自我統合），③発達的危機（素因が発現する可能性の時期と環境的状況の危機），④素因の力動的拮抗性における個人の発達的危機（発現する素因に異和的に作用する力動的な緊張のバランス；信頼性対不信／自発性対恥・疑惑／自律性対罪意識／勤勉対劣等感／同一性対同一性拡散／親密性対孤立／生殖性対停滞／自我統合対絶望），⑤世代の循環としての危機（③の環境的状況の発達的危機と④の個人の発達的危機の力動的関係，個人と家族の発達的危機の交差による円環的プロセス）である。

Erikson が提示した「漸成論（epigenesis）における‘epi’は空間では「上」を，時間では「前」を意味し，genesis（創生）と結びつくことによって，すべての発達の時間的，空間的性質を表現できると説明されている（Erikson, E.H., Erikson, J., & Kivnik, H.Q. 1986）。それはまた，発達図式の‘織物’にたとえられている（鑪，1990）。その織物には8種類のそれぞれの純粋な色糸に異和的な素因を示す暗色の縦糸が交ざり合っているようなもので，個人によって程度の差はあっても，誰もが回避することができない状態で織り込んでいく過程を示している（図 6）。

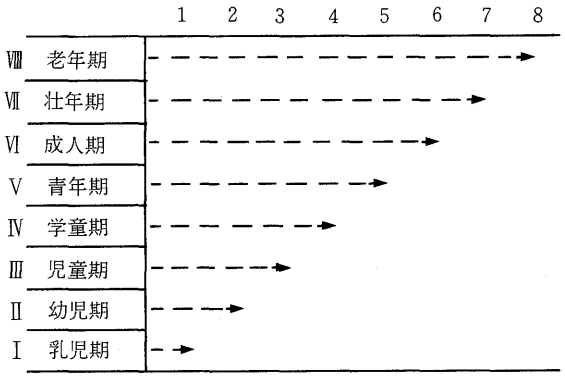


図6　発達危機の重層性

出典：鑪幹八郎　1990 「ライフサイクルと家族」小川、他編『臨床心理学大系3』金子書房.

Erikson は成人期の発達段階を3つに分け，およその年齢を仮定して，early adulthood（20～40），middle adulthood（41～65），later adulthood（66＋）としたのである。彼自身は自らのモデルによる実証的研究は行なっていない。

（3）Levinson の発達段階論の研究

ライフサイクルの概念に基づいて成人前期から中年期の実証的研究を行い，より詳しい成人期の発達段階論を導いた一人は Levinson（1978，1980）である。彼の研究は35～45歳の40名の男性を対象として面接法で個人史を作成し，発達段階の一般論を示そうとした。

Levinson の発達段階についての基本的な考えは，ライフサイクルにおける「発達期（安定期）」と「過度期（移行期；transition）」によって特徴づけられる。発達期（1．児童期と青年期/0～22，2．成人前期/17～45，3．中年期40～65，4．老年期60以降）は広い意味で年齢を指し，各時期には特有の生活の特性があるとみられている。これらの発達期は一部では重なり合い，前の時期がまだ終わらないうちに新しい時期に入るが，一定の順序をもち，ライフサイクルの巨視的構造を構成していると説明されている。

過度期について Levinson は，一つの発達期から次の発達期へ移行するときのことであり，それはその人の生活構造を根本的に変える必要があるくらい複雑であることを発見している。そして過度期は3年以下ということはなく，6年以上かかることもまずないと把握し，それは二つの発達期の終わりと始まりの境界域をつくると考えられた。過度期が終わるのは，特定の出来事が生じたときでも，ある面の発達が完了したときでもなく，疑問を抱き探索することがさし迫った問題でなくなり，重大な選択を行なって新しい生活構造を導きそのなかで生活していく用意ができたときである。そのときは「移行期」とも呼ばれる。

このような考えを Levinson は，図（7）のようにあらわした。彼の研究は臨床的にもユニークな特徴をもち，調査の量と質に卓越していることが認められているが，成人前期よりも中年期の，それも男性の資料のみに偏っていることが指摘されている。

（4）Peck, Vaillant の段階論

成人の人格的発達について段階的な見解をもつ点では同じである Peck（1986）と Vaillant（1977）は，Erikson の成人の段階の記述があまりにも概略的であることを指摘し，より精密な段階論のモデルを提示している。

Peck は中年期に4つ，老年期に3つの発達段階を示している。中年期に関していえば，①知恵対体力，②仲間対異性，③対人関係の柔軟性対貧困さ，④精神的柔軟性対固さ，に直面し挑戦する発達過程が示唆された。また Vaillant は，Erikson の中年期の段階にさらに2つをつけ加えた（①職業的地固め，23～35;②意味の保持対固さ，45～55）。

（5）Gould の段階論

発達は年齢相関的に進むという見解に立ついま一人の代表的な理論家は Gould（1972，1978）である。精神分析家の彼は精神科外来受診者を年齢別に7つのグループに分け，観察と質問によって各グループに特有の外界や自己に対する感じ方のあることを見いだし，さらに人生の段階を明確にするために524人の男女を対象にした研究を行い，成人について7つの発達

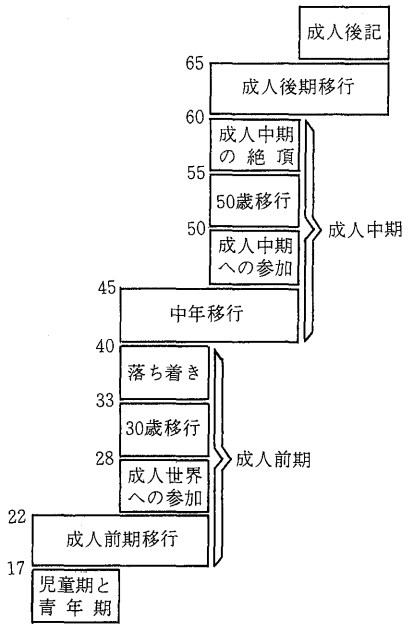


図7　成人前期と中年期における発達段階

出典：Levinsin, D.J. 1978 The Seasons of a Man's Life. The Sterling Lord Agency Inc., N.Y.（南　博訳　1980　人生の四季　講談社）

段階を示した。彼は成人前期か中年に入る時期（4，5の段階に大きな変動のあることを認め，これらの段階を発達と危機の拮抗のある時期と考えた。Gould の研究については，一面で，調査対象者の偏りや，研究方法の手順の問題や統計的分析がなされていないので，幾つかの問題点が指摘されている。例えば，McCrae と Costa（1990）は，Gould が50歳以降の成人の発達にほとんど変化を認めていないのは，彼がその年齢の被験者について調査していないことを指摘している。

4．無段階発達理論と成人の発達

段階論を中心とした成人の人格的発達を考えるとき，'長生き'という生命時間が発達の前提のように受けとられるかもしれない。Neugarten（1980）は「28歳の市長，30歳の大学長，35歳の祖母，20歳の退職者，55歳でビジネスを始めた未亡人，70歳の学生」のような'年相応でない'成人の存在に注目し，成人は極端に単純化された段階論が示唆するよりもはるかに変化，発達するのではないかという問題提起をし，ライフイベントの構造の重要性を示唆した。

（1）Neugarten らの研究とライフイベントの考え方

Neugarten は20年にわたり中年の心理的研究を続け，中年はその独特な主観的体験，関心事，仕事，愛，時間，死などによって特徴づけられることを把握した。さらに彼女と共同研究者ら（Neugarten & Datan,1973）は，中年に生じる個人的なライフイベント（ポジティブなもの；結婚，昇進，ネガティブなもの；病気，離婚，死）とともに，これらが発生してくるタイミングに影響を及ぼす社会的・歴史的文脈の重要性に注目した。例えば，教育や労働における

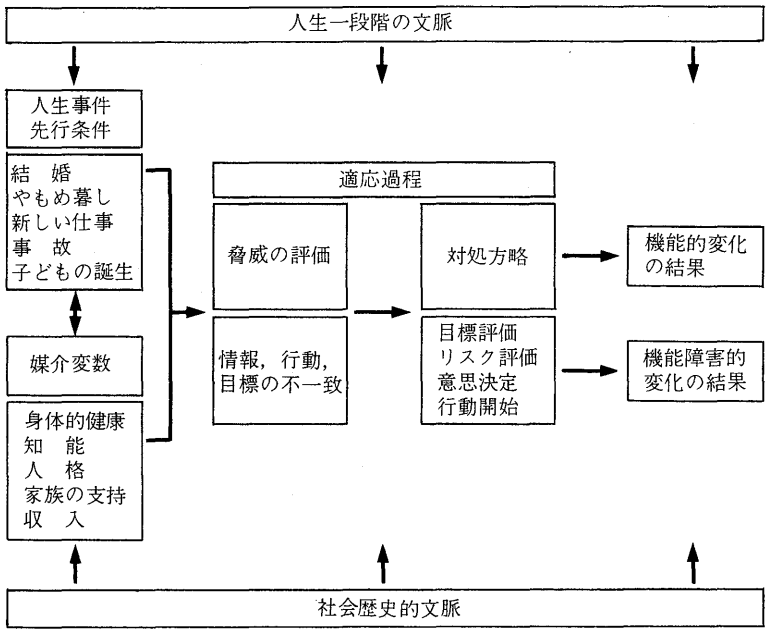


図 8　人生―ライフイベント枠組み

出典：Hultsch, D.F., & Plemons, J.K. 1979 Life events and Life span development. in P. B. Baltes & O.G. Brim. Jr. (Eds.) 1979 Life-span developmental behabior. New York: Academic Press.

社会的，歴史的変遷は，結婚やこどもを産むというようなライフイベントのタイミングを複雑にしているという問題がみられる。Neugarten は成人の発達を理解するためには，生命時間，社会的時間，歴史的時間という 3 つの時間の相互関係を考えなければならないことを主張している。

同じように Hultsch & Plemons (1979) は，ライフサイクルとライフイベントの相互の関係のなかで，人格的，心理的発達の構造を図式化することを試みている（図 8)。それによると，4 つの主要な要素である，ライフイベント，ライフイベントを軽減する媒介変数，そして適応プロセスから成り立ち，結果は適応もしくは不適応を生じさせると仮定されている。

このような文脈論的アプローチには今日ますます関心が寄せられ，実証的研究へと着手されてきている。

（2）Bandura と Mischel の社会学習論と成人の発達

Bandura (1977) と Mischel (1973,1981) は認知的社会学習論の立場から，成人の人格の発達に関する無段階論を示唆した。Bandura は，個人は 内的力によって駆り立てられるだけでもなく，また外的要因のみによって無力に操られることもない，と述べている。彼によると人間の心理的構造は，行動とその統制条件との連続的な補完的相互作用を分析することによってむしろ最もよく理解することができると主張される。つまり行動は部分的に環境を構成し，その結果としての環境は次の行動に影響すると説明され，この行動概念は「相互決定」と呼ばれている。Mischel もまた成人の人格と人生を理解するために，認知的概念を検討している。そこには，期待，計画，符号化，方略，個人的構成概念，主観的刺激価がふくまれることが指摘

されている。例えば，人はある計画を立てると，それは，数か月，数年間，その人の行動を導き，その決断はそれらの年月の過ごし方などに重要な意味をもたらす場合があげられる。

このような社会学習理論における成人の発達については，行動の決定の際の社会的文脈の重要性が認識され，したがって，「人格＝人×事態の相互作用」という等式によって記述されることが示唆された。Santrock（1985）は，この成人像は「経験と認知的活動による積極的で意識的な問題解決者というイメージ」で特徴づけられると述べているが，機械論的な学習論を越えて，また段階論の年齢による成熟の観念から視点を変えた発達論として興味深い。

5．中年期成人の人格研究への展開

近年に至るまで，成人のなかでも，中年期に焦点をおいた本格的研究は多くはなかった。たいていの成人の発達研究では，中年期については青年期あるいは老年期の発達との関係から研究されるという形態でなされることが多かった。とりわけ中年期の研究が意識されるようになったのは，アメリカにおいては1978年頃から，かってない中年期（40〜64歳）人口の増大がさまざまな問題をもたらすとして一般に認められたことにもよる。Levinson や Gould のほか Sheehy（1976）の中年者の事例研究報告は，ジャーナリスティックな人気を呼んだほど一般の関心が高まったらしい。わが国においては，1970〜1990年にわたって，20〜64歳人口の全人口に対する比率が60% 以上を超え，また社会の経済構造が低成長期に入って，中高年層の人口過剰が突出して目立ってきた（大橋，1990）。社会変動からくる中高年の諸問題とともに，1984年頃からわが国の中年者のとくに男性の自殺率と精神障害の受療率が，青年期のそれはむしろ低下しているのに対して，著しく増加していることが指摘されるようになった（佐藤，1990）（図9）。こうしてようやくわが国においても，中年者の発達研究が着手されてきた。

中年期の発達研究の基礎となった有意義な研究は，有名なカルフォルニア縦断研究（California Longitudinal Study）における1920年以降に誕生した個人の約50年にわたる人生史に関する研究資料とともに，後に展開した幾つかの縦断研究（Guidance Study, Berkley Growth Study, Orkland Growth Study）があげられる。これらは発達心理学，老年心理学，その他の

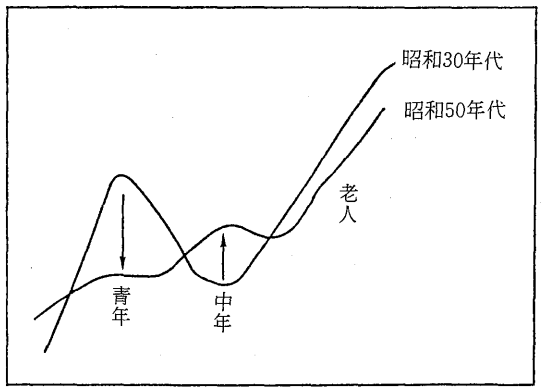


図9　自殺率の世代別変化
出典：野田正彰　1986『都市人類の心のゆくえ』日本放送出版協会

分野でしばしば検討されているので，ここではその重複を避けるが，世界中で成人の発達研究の基礎となっていることは確かである。

発達研究が中年期に焦点化されるようになると，それらの研究のなかで中年期の心理的発達観が示されるようになった。Hultsch と Deutsch（1981）は，研究者らの中年期の発達観を，①移行期であり危機期（クライシス期）である，②移行期であるが危機期ではない，③移行期あるいは危機期である，の三つにまとめている。

①の移行期であり危機期であるとする見解は Erikson, Levinson, Vaillant らの段階論者らの主張であり，対極するものの力動的な緊張のバランスという点からくるものである。②の移行期であるが危機期ではないという立場は Nuegarten（1970）にみられ，彼女が「ライフサイクルの心理学は危機の心理学ではなく，タイミングの心理学である。危機を経験する中年者はむしろ少数であり，経験したとしてもライフコースのリズムに予期しない障害が介入したことによる」と説明し，成人はライフコースにおけるライフイベントのタイミングのセンスを発達させることが重要で，危機であっても，自己概念やライフコースの感覚を大きく見失うものではなく，むしろ危機というのは自己概念や同一性の感覚が大きく変更をせまられるときであるという見解を主張して，人は中年期に時間に関する展望の移行を経験することを示唆した。また，Costa と McCrae（1980）は "Still Stable after All These Years: Personality as a Key to Some Issues in Adulthood and Old Age" という論文のなかで，彼らの研究と他の諸説とを考察しているが，それによると彼らは，人格は三つの次元（神経質傾向，外向性，経験への開放性）によって理解されるとし，これら次元の連続性は成人期を通してみられ，成人期においては人格の安定性は原則でさえあると明言している。③の移行期あるいは危機期である，という見地は，Hultsch と Deutsch（1981）によるが，彼らは，中年期を移行期または危機期として焦点化することは正しくないとする。中年期には，ある人は危機に陥ったようにみえ，他の人はそのようにみえない。むしろ中年期には個人の影響要因となる種々のライフイベントと媒介変数としての役割にもっと注目すべきであると主張する。したがって彼らは，中年期は危機のある移行期もしくは危機のない移行期としてみる限りライフイベントはその問題の焦点であることを指摘する。

今日‘中年期危機’がとくにその内容の次元の詳しい説明のないまま，言葉がひとり歩きをしているような感じをうけることがあるが，さらなる研究の展開によって一考を要すると思われる。ともあれ，中年期の人格的，心理的な特徴は青年期までや老年期までのそれと異なる「発達期」として検討されていると考えられる。それではどのような特徴があげられるのか，Erikson の中年期の発達課題の考え方を検討することによって探っていくこととする。

6．Erikson 理論における発達課題

前項までに検討してきた成人の発達研究のなかでも，生涯的な発達研究における段階論が強調される場合，それぞれの段階に発達課題が仮定されている。いろいろな理論家が提示した発達課題の分析や検討はすでになされており，本稿では行なわない（岡本，1990）。今回は幼児期

から老年期まで，最も生涯的なパースペクティブにより段階論を展開し，中年期の発達課題を「生殖性」としてその年代の成人発達のユニークな見解を示したErikson理論を中心として考察する。

発達課題を最初に用いたとされるHavighurst（1973）は，この概念が誕生した経緯を述べている。彼は1935–1950年の時期にBlos, Erikson, Tyron, らが参加した研究会＊において，彼ら研究者たちは，個人の成長動因が社会環境（家族，学校，同輩，共同社会など）によってもたらされる要求や圧力，機会と組み合わさっていく必要性が，いかにくり返し現われるかを，主に児童の発達についての膨大なデータを分析するなかで認識し，人が環境とかかわって成長していき，その過程で解決し，適応すべき葛藤があり，挑戦すべき課題があることを議論し，自然に‘発達課題’という言葉を使うようになったという。Havighurstは1948年，彼の講義のなかでこの用語を使用し，彼の発達課題の内容は今でも新鮮である。1950年，Eriksonは『Childhood and Society』を発表した。以来，発達課題を提示する理論家は多いが，Jung（1931）はそれよりも20年も前に中年期の発達課題が「個性化」であることを示唆していた。

（1）Erikson理論における発達課題の考え方

‘発達課題’という言葉は達成すべき規範あるいは目標で，理論家のもつ道徳規範や価値観に属する問題のような感じがするかもしれない。この点についてそれぞれの理論家の考えを正しく理解するように導くことは，かなり難しい作業である。ただどの理論家も長年の彼らの研究に基礎づけられた上での発達課題の提示である。もともと生物学的な発達の漸進観では「個体発生は系統発生を繰り返す」という反復説が認められ，それはFruedにつながる心理学に影響を与え，その発想から発達課題という考えが生まれてきたと考えられている（氏家，1992）。Fruedのlibidoやpshychic energyの考えからくる葛藤解決（口唇期，肛門期，男根期，性器期）はそれを示すものであろう（Wrightsman,1994）。発達課題が規範か経験的事実かという点について検討する必要があると考える。小此木（1985）は，発達課題は，それが人間を臨床的に理解する上で最も基本的なものとなったことに言及するとともに，それは社会の側が個人に課すという価値規範の側面をもっていると述べている。Eriksonの言葉には難解な点が多いが，1950年の『Childhood and Society』（仁科訳）において，8つの人間の発達段階の図式に示された各年代の，拮抗する対極のものから導かれるもの（とくに発達課題とは言わない）について「それがなければ，またそれが世代から世代へと引き継いで再現することがなければ…人間の価値の諸体系がその精神や関連性を失ってしまう」「人間の基本的徳目（virtue）とよばれる」「人間の基本的強さ」であると表現している。また彼は『Psychological Issues:Identity and the Life Cycle（1959）』においては「成長するものはすべて予定表（ground plan）を持っていて，すべての部分が一つの機能的な統一体を形づくる発生過程のなかで，この予定表から各部分が発生し，その各部分はそれぞれの成長がとくに優勢になる時期を経過する」と述べてグランドプランの考えを示し，予定表のなかに組み込まれた‘発達課題’のことを示唆している。鑪はそれを「素因」としている。Eriksonは各段階でこれら組み込まれたものは「同調傾向（syntonic tendencies）と失調傾向（dystonic tendencies）の葛藤から現われる心理社会的

強さを表す」と説明している（『The Life Cycle Completed (1982)』）。

このようなErikson のグランドプランの考え方からくる発達課題は，生得的に組み込まれていて，世代を通して受け継がれていくようなものとうけとれる。しかし彼は，それは個人の自我における心理社会的危機（同調傾向と失調傾向）の葛藤解決によって「前進する」と主張する。そして危機というのは転機の特質であり，前進か退行か統合か遅滞かを決定する瞬間の特質であると説明している。生得的なものであれば我々は努力しないでも獲得できることになるが，Erikson 理論ではそこに自我の能動的な選択や積極的な取り組みが伴うことが強調されている。したがって「発達課題」と呼んでもよいであろう。

西平（1993）は教育哲学の立場から考察して，Erikson のいう徳目（発達課題）は，事実であるかといえば，むしろそれは育てられていくべきで，肯定的目標であり，しかし規範であるかといえば，むしろ人が生きるために最低限生得的に備わっている基本的強さと見るべきで，そうした事実性と規範性という二律背反的な枠組みに収まり切らないものの見方ことがErikson 理論のもつ実践性であると述べている。

Erikson は3つの成人期の「人間の基本的強さ」（発達課題）を，親密性 / 孤立⇒愛，生殖性 / 停滞⇒世話，統合 / 絶望⇒英知，とした。

（2）Erikson 理論の中年期の発達課題

Erikson 理論における成人の発達のなかでも，中年期は特異な位置が与えられていると思われる。この時期の人間的強さ（発達課題）は「生殖性 / 停滞⇒世話 generativity/stagnation⇒care」と仮定されているが，Erikson はこれについて「次の世代を確立させ導くこと」を本質としている（『Childhood and Society』1950）。このことは，ライフサイクルが個人の一つの完結する人生としてとらえられるばかりでなく，次の世代を生み育てていくことを含蓄する。彼は「家族というものは，赤ん坊に育てられることによってのみ赤ん坊を育てることができる」と述べて，年長の世代は年少の世代が年長の世代に依存するのと同じ程度に年少の世代を必要とすることを明らかにしている（『Psychological Issues: Identity and The Life Cycle (1959)』『Identity and the Life Cycle (1959,1980)』）。

Erikson は自らの臨床的経験と研究から，中年期の成人はその年代の心理社会的葛藤の解決努力による自我発達と適応的な参加による社会過程を通じて，彼らの創造性，愛情，真理，正義などの普遍的価値が，次の世代の自我同一性の発達に欠くことのできない支持となることを観察してきた。そして中年期の人々がこの段階における人格的強さの「世話」を獲得して豊かに成熟することに完全に失敗してしまうと，擬似的親密さを求める強迫観念的欲求へ退行し，停滞感と人格的貧困に陥ることが示唆された。

さらに中年期の本質のいま一つは，自らの世代と次世代との連関だけではなく，‘世話すること’‘養うこと’‘維持すること’の経験は各人生段階をまとめて一つの人生のサイクルを創り出し，新しく生まれた者のなかにサイクルの始まりを再創造させ，最終的には生命を与えた前世代と生命を育む責任ある世代との三世代を結びつけると，説明されている。

このようにErikson のライフサイクル論は，中年期の発達課題のなかに，完結と連関という

二重の意味を強調したユニークなものと受けとれる。この世代（generation）を強調したErikson の発達課題における生殖性を鑪は「世代性」とよんでいる。つまり中年期成人は青年の自我同一性の確立を助ける「親であること」に責任があるというところに焦点をおいた理解である。Erikson は産みぱなっしであることは堕胎的であるが，育て世話をすることに生けるものの本質があり，それが人の心理社会的危機をもたらすことを洞察している。

世代性に対して，生殖性という場合，親であることの意味以上にいろいろな考えが含蓄されるやや難解な概念であることが理解される。Erikson によると生殖性とは「包括的な意味で産み出すこと，世代から世代へと産まれていくあらゆるもの，子供，事物，技術，思想，芸術作品など，生み出し育むことを意味する」である（『Childhood and Society』仁科訳）。このことから中年期成人の責任は「人間と生産物と理想の相関的領域のもの」と理解されるべきであって，Erikson はそれを「世界の維持的生殖性」と呼んでいる（『The Life Cycle Complited (1982)』『Vital Involvement in Old Age (1986)』）。実際，現実の世界は中年期成人のリーダーシップを中心として維持されていると思われるが，この発達段階は個人志向的な青年期の同一性の段階や成人前期の重要な他者との親密な関係の確立を重視する段階から，より大きなグループや世界，家族，共同社会，社会一般に関心を転化させて，現実参加をして，中年者個人はより自我を発達させパーソナリティが成熟する状況が理解される。つまり，中年期成人は他者の発達に自らを介入させて，自らに還元し，同一性の発達と安定化を導く段階にあるのであろう。

成人発達の研究者は，たいてい Erikson 理論の生涯的，統合的枠組の重要性を認めながらも，その実証的研究による証明の困難さを自覚している。またこの理論の縦断的研究には手がつけられていない。Gruen（1964）の Erikson 理論の 8 段階の発達課題の発達評定の研究は，初期の試みとして意義深い。今日では Rosenthal ら（Rosenthal, Gurney, Moore, 1981）が「Erikson 心理社会的段階目録（EPSI）を開発し，わが国でも検証が試みられるようになった（中西，1985; 佐方，1985）。

おわりに

本稿は中年期の人々のパーソナリティの実証的研究を実施するに当たって，成人の発達とは何か，また今日，成人の発達について，どのような研究動向が見られるのかを概観した。今回は短い論考にすぎないが，それでもそこから人間の生涯にわたる多様でダイナミックな変化を追究する「生涯発達心理学」の理論的枠組や，新たなアプローチの可能性について多くの示唆が得られたと思われる。

中年期の成人については，その人格的，心理的発達はあまりにも多様で，また発達にかかわる要因も複雑であり，一般化が困難であるため，実際になされた実証的研究は多くはない。個体発生的な段階的変化を中心とした研究から，ようやく手がつけられているのが現状と思われる。そのため，本稿では，最後にエリクソン理論と発達課題にとくに関心をもち検討したが，中年期のパーソナリティを焦点とした論考に関しては，今後も一層の追究が必要であると痛感

された。

引用・参考文献

東　洋　1992　発達心理学の課題　東　洋・繁多　進・田島信元(編)　発達心理学ハンドブック　福村出版.

Baltes, P.B., Reese, H.W., & Lipsitt, L.P. 1980. Life-span developmental psychology. Annual Review of Psychology, 31, 65-110.

Baltes, P.B., & Nesselroade, J.R. 1973. The developments of individual differences on multiple measures. In J.R. Nesselroade & H.W. Reese (Eds.) Life-span Developmental Psychology: Methodological Issues. New York: Academic Press, 219-251.

Baltes, P.B., & Willis, S.L. 1978. Life-span developmental psychology, cognition, and social policy. In M.W. Riley (Ed.). Aging from Birth to Death. Washington, D.C.; American Association for Advancement of Science.

Baltes, P.B., & Goulet, L.R. 1970. Status and issues of a life-span developmental psychology. In Goulet, L.R. & Baltes, P.B. (Eds.). Life-span Developmental Psychology. New York: Academic Press. Baltes, P.B. 1979. Life-span developmental psychology : some converging observations on history and theory. In Baltes, P.B. & Brim ,Jr. O.G. (Eds.) Life-span Development and Behavior, Vol. 2. New York: Academic Press.

Bandura, A. 1977. Social learning theory. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.

Bayley, N. 1963 The life-span as a frame of reference in psychological research. Vita Humana, 6, 125-139.

Bowlby, J.M., 1978. Attachment and loss, Attachment, Vol. 1. Basic Books, New York.

Bühler, C. 1933. Der menschliche Lebenslauf als psychologisches Problem. Leipzig: Hirzel.

Capon, N., & Kuhn,D. 1979. Logical reasoning in the supermarket; Adult femeles'strategy in an everyday context. Developmental Psychology, 15, 450-452.

Charles, D.C. 1970. Historical antecedents of life-span developmental psychology. In L.R. Goulet, & P.B. Baltes (Eds.). Life-span Developmental Psychology. New York: Academic Press.

コーエン, L.B.　1979/1981　高橋道子訳　乳児の知覚と認知に関する最近の知識, または, 波多野誼余夫監訳　子どもの知的発達(児童心理学　3)　金子書房.

Cole, M., & Cole, S.R. 1989. The Development of children. Freeman.(コール, M., スクリブナー, S. 1974/1982 若井邦夫訳　文化と思考ー認知心理学的考察　サイエンス社.)

Costa, J. & McCrae, R.R. 1980. Still stable after all these years: Personality as a key to some issues in adulthood and old age. In P.B. Baltes & O.G. Brim (Eds.), Life-span Development and Behavior. New York: Academic Press.

Elder, G.M., Jr. 1974. Children of the great depression. Chicago: University of Chicago Press.

Elder, G.M., Jr. 1975. Age differentiation and the life course. Annual Review of Sociology, 1, 165-190.

Elder, G.H., Jr. 1977. Family history and the life course. Journal of Family History, 2, 279-304.

Erikson, E.H. 1950, 1963. Childhood and society. W.W. Norton & Company, Inc. (仁科弥生訳 1989幼児期と社会Ⅰ.Ⅱ　みすず書房.)

Erikson, E.H. 1959, 1980. Identity and the life cycle. W.W. Norton & Company.(小此木啓吾訳編 1976　自我同一性　誠信書房)

Erikson, E.H. 1982. The life cycle completed. Rikan Enterprises Ltd.(村瀬孝雄・近藤邦夫訳　1993 ライフサイクル, その完結　みすず書房)

Erikson, J.M., Erikson, E.H.& Kivnick, H.Q.1986. Vital involvement in old age. W.W. Norton &

Company, N.Y.(朝長正徳・朝長梨枝子訳　1990　老年期　みすず書房)
Flavell J.M. 1963. The developmental psychology of Jean Piaget. Princeton, N.J. : Van Nostrand.
Flavell, J.H. 1977. Cognitive development. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
Flavell, J.M. 1970. Cognitive changes in adulthood. in L.R. Gould & P.B. Baltes (Eds.) Life-span developmental psychology: Research and theory. New York, Academic Press.
Freud, S (1856～1939) in J.Strachy (Ed.) 1964 The standard edition of the complete psychological works of Sigmund Freud, Vol. 22.　Hogarth Press, London.
Goldberg, D.P. 1972. The detection of psychiatric illness by questionnaire, A technique for the identification and assessment of non-psychiatric illness. Oxford University Press, London.
Gould, R.L. 1972. The phases of adult life: A study in developmental psychology. American Journal of Psychology, 129, 521-531. Gould, R.L. 1978 Transformations : Growth and change in adult life. New York : Simon & Schuster.
Gruen,W. 1964. Adult personality : An empirical study of Erikson's theory of ego development. in B.L. Neugarten (Eds.) 1964 Personality in middle and late life. New York: Atherton Press, Prentice Hall.
Groffmann, K.J. 1970. Life-span developmental psychology in Europe: Past and present. in L.R. Gould & P.B. Baltes (Eds.) 1970　Life-span developmental psychology: Research and theory, New York, Academic Press.
波多野完治編　1965/1976　ピアジェの認識心理学　国土社.
Havighurst, R.J. 1973. History of developmental psychology: Socialization and personality development through the life span. in P.B. Blates & K.W. Shaie (Eds.) 1973 life-span developmental psychology. New York: Academic Press.
Havighurst, R.J. 1948/1972. Developmental tasks and education. New York: David McKay.
Hollingworth, H.L. 1927. Mental Growth and decline: A survey of developmental psychology. New York: Appleton.
Holmes, T.H., & Rahe, R.H. 1967. The social readjustment rating scale. Journal of Psychosomatic Research.
Hultsch, D.F., & Plemons, J.K. 1979. Life events and life span development. in P.B.Baltes & O.G. Brim. Jr. (Eds.) 1979 Life-span developmental behavior. New York: Academic Press.
Hultsch, D.F., & Deutsch, F. 1981. Adult development and aging: A life span perspective. McGraw-Hill Book Company.
飯田　真編　1990　中年期の精神医学　医学書院.
Inhelder, B., & Piaget, J. 1958. The growth of logical thinking from childhood to adolescence. Basic Books.
Jung, C.G. 1931. translated by R.F. Hill. 1960. The stages of life. The collected works: Structure and dynamics of the psyche, Vol. 8. N.Y. Pantheon.
Jung, C.G. 1948. über die Psychologie des Unbewussten. Zurich.(高橋義孝訳　1977 無意識の心理　人文書院)
ユング, C.G. 林　道義訳　1991　個性化とマンダラ　みすず書房.
Kagan,J. 1980. Perspectives on continuity. in O.G. Brim & J. Kagan (Eds.) Constancy and change in human development. Cambridge, MA: Harvard University Press.
Kagan, J., Moss, H.A., & Sigel, I.E. 1970. Psychological significance of styles of conceptualization. in Cognitive development in children: Five monographs of the society for research in child development. Chicago: Univ. of Chicago Press.
Kohlberg, L. 1969 Stage and sequence: The cognitive developmental approach to socialization. in D.A. Goslin (Ed.). Handbook of socialization theory and research. Chicago:Rand-McNally.

Kohlberg, L. 1981. The philosophy of moral development: Moral stages and the idea of justice: Essays on moral development 1. New York: Harper & Row.

Kohlberg, L. 1973. Continuities in childhood and adult moral development revisited. in P.B. Baltes & K.W.Shaie (Eds.). Life-span developmental psychology: Personality and socialization. New York: Academic Press.

Lavoie, J. C. 1976. Ego identity formation in middle, adlescence. Journal of Youth & Adolescence, 5, 371-384.

Lerner, R.M., & Busch-Rossnagal, N.A. (Eds.) 1981. Indivisual as producers of their development: A life-span perspective.Academic Press, Inc.(上田礼子訳 1990 生涯発達学　岩崎学術出版社)

Levinson, D.J. 1978. The Seasons of a Man's Life. The Sterling Lord Agency, Inc., N.Y. (南　博訳 1980人生の四季　講談社)

Mahler, M.S., Pine, F. & Bergmann, A., 1975. The Psychological Birth of the Human Infant. Basic Books,New York.

McCrae, R.R., & Costa, P. T., Jr. 1990 Personality in adulthood. New York : Guilford.

Meier, C.A. 1972. Personlichkeit-Der Individuationprozess in Lichte der Typologie C.G. Jungs. in Lehrbuch der Komplexen Pshychologie C.G. Jungs: Personlichkeit(Band Ⅳ). (C.A.マイヤー著, 氏原　寛訳　1993　個性化の過程　河合隼雄監修　ユング心理学　概説4, 創元社.)

Mischel, W. 1973 Toward a cognitive social learning reconceptualization of personality, Psychological Review, 80, 252-283.

中垣　啓　1984　矛盾と均衡化　波多野完治監修　ピアジェの発達認識論　国土社.

中西信男・水野正憲・古市祐一・佐方哲彦　1985　アイデンティティの心理学　有非各閣.

中西信男　1989　人間形成の心理学　ナカニシヤ出版.

Neugarten, B.L., & Havighurst, R.J. & Tobin, S.S. 1968. Personality and patterns of aging. in B. L. Neugarten (Ed.). Middle age and aging. Chicago Univ. Press.

Nuegarten, B.L. 1968. Adult personality : Toward a psychology in the life cycle. in B.L. Neugarten (Ed.). Middle age and aging.　Chicago Univ. Press.

Neugarten, B.L., & Datan, N. 1973. Sociological perspectives on the life cycle. in P.B.Baltes & K. W. Shaie (Eds.) Life-span developmental psychology. New York : Academic Press.

西平　直　1993　エリクソンの人間学　東京大学出版会.

大川一郎　1989　高齢者の知的能力と非標準的な生活経験との関連について　教育心理学研究　Vol. 37. 2., 100-106.

小川捷之・齋藤久美子・鑪幹八郎　1990　ライフサイクル　河合隼雄・村瀬孝雄・安香　宏・鑪幹八郎・福島　章・小川捷之監修　1990　臨心理学体系　3　金子書房.

岡本裕子・山本多喜司　1985　定年退職期の自我同一性に関する研究　教育心理学研究　33, 185-184.

岡本裕子　1985　中年期の自我同一性に関する研究　教育心理学研究　33, 295-306.

岡本裕子　1986　成人期における自我同一性ステイタスの発達経路の分析　教育心理学研究　33, 352-358.

岡本裕子　1990　中年期・自己実現をめぐって　小川捷之・齋藤久美子・鑪幹八郎　臨床心理学体系　3　金子書房.

大橋正和　1990　社会変動と中年期　飯田　真　中年期の精神医学　医学書院.

Peck, R.C. 1968. Psychological developments in the second half of life. in B.L. Neugarten (Ed.) Middle age and aging. Chicago: Univ. Press.

Perlmutter, M.& Hall, E. 1992. Adult development and aging. John Wiley & Sons, Inc.

Piaget, J. 1964. Sixetudes de psychologie. Geneve : Gonthier.(滝沢武久訳　1968　思考の心理学　みすず書房)

Piaget, J., & Inhelder. B. 1966 La psychologie de l'entant. Paris: P.U.F. (波多野完治・須賀哲夫・岡郷　博訳　1969　新しい児童心理学　白水社.)
ピアジェ, J. 波多野完治・滝沢武久訳　1947/1960　知能の心理学　みすず書房.
Quetelet, A. 1842. A treatise on man and the development of his faculties. Edinburgh : William and Robert Chambero, or in P.B. Baltes, 1979. Life span developmental psychology: Some converging obsevations on history and theory. in P.B. Baltes & O.G.Brim, Jr. (Eds.). Life-span development and behavior. New York: Academic Press.
Rasmussen, J.E. 1961. An experimental approach to the concept of ego identity as related to charactaer disorder. Dissertation Abstracts International, 22 (5-A), 1911-1912.
Rasmussen, J.E. 1964. The relationship of ego identity to psycho social effectiveness. Psychological Reports, 15, 815-825.
Riegel, K.F. 1976. The dialectics of human development. American Psychologist, 31, 689-700.
Rosenthal, D.A., Gurney, R., & Moore, S.N. 1981. From trust to intimacy: A new inventory for examing Erikson's stage of psychosocial development. Journal of Youth and Adolescence, 10, 525-537.
Rowntree, B.S. 1901/1922. A Study of Town Life.(ラウントリー, B.S. 長沼弘毅訳　最低生活費研究　高山書院　1943.)
佐方哲彦　1985　青年期の同一性形成――EPSIによる発達課題の達成過程の解明　青少年問題研究　49-64.
Santrock. J.W. 1985. Adult development and aging. Wm. C. Brown Publishers.(今泉信人・南　博文編訳　1992　成人発達とエイジング　北大路書房)
Sheehy, G. 1976. Passages. New York: Dutton.
Siegler, R.S. 1976. Three aspect of cognitive development. Cognitive Psychology, 8, 481-520.
Siegler, R. S., & Leibert, R.M. 1975. Acquisition of formal scientific reasoning by 10- and 13-year olds: Designing a factorial experiment. Developmental Psychology, 11, 401-402.
Spitz, R.A. 1946. Anaclitic depression. The Psychoanalytic Study of the Child, Vol. 12, 313-342. Yale Univ. Press, London.
Stern, D.N. 1985. Interpersonal World of the Infant. Basic Books, New York.(神庭清子・神庭重信訳　1989　乳児の対人世界　岩崎学術出版社)
ストー, A 1991 河合隼雄訳　ユング　岩波書店.
谷口幸一・大塚俊夫　1982　高年者のパーソナリティに及ぼすライフイベントの影響. 老年社会科学, 4, 111-127.
田島信元編　1989　心理学キイワード　有非閣.
鑪幹八郎　1990　ライフサイクルと家族　小川捷之・齋藤久美子・鑪幹八郎編　臨床心理学大系　3　金子書房.
鑪幹八郎・山本　力・宮下一博編　1984　自我同一性研究の展望　ナカニシヤ出版.
Thomae,H. 1979. The concept of development and life-span developmental psychology. in P.B. Baltes & O.G.Brim,Jr. (Eds.). Life-span development and behavior. New York : Academic Press.
氏家達夫　1992　発達のモデルとしての進化の理論　東　洋・繁多　進・田島信元編　発達心理学ハンドブック　福村出版
Vaillant, G.E. 1977. Adaptation to life. Boston: Little, Brown.
Winnicott, D.W. 1965. The maturational process and the facilitating environment. International University Press, New York.
Wohlwill, J.F. 1973. The study of behavioral development. New York: Academic Press.
Wrightsman, L.S. 1994. Adult personality development: Theories and concepts. Sage Publica-

tions, Inc.

（原稿受理　1994年 9 月 9 日）